

Title	社会思想家としてのウヰリアム・モリス (六、完)
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.12 (1921. 12) ,p.1667(113)- 1693(139)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211200-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「E」より以上の何ものかになすところの統一した一般化を發見することはないことだらうか。』(“Surveys,” pp. 18-21)

經濟史研究の必要に關して、アシュレーは上述の三點を擧げて居る。然し余は更に別の方面からして更に一つの理由を擧げたい。それは經濟學の研究方法として經濟史が缺くべからざるものであることである。すでに述べたやうに社會に於ける二個の必然性を考ふる時、歴史科學若しくは文化科學としての經濟學が其の採るべき研究方法が單なる自然科學的方面のみであつてはならないことは極めて明かなことであらう。然し乍らこゝに歴史的研究の必要を云ふも、それは從來の所謂歴史派經濟學の採用せるものとは少しく其の趣きを異にする。個々の歴史的研究に基き是より歸納して一の自然科學的因果法則を發見しようとするのは、人類の社會

生活の一面たる經濟生活を其對象とすべき經濟學の研究方法として妥當なものであると云ひ得ない。今日の經濟學が大體に於いて貨幣を中心として考察され、經濟價值は貨幣を以つて稱量され、——換言すれば經濟上議論となるは主として價格論であるが如きは、明かに經濟學が今日の時代を背景とする歴史科學であることを示すものである。而して今日の時代を形成する過去の事實が又是と至大なる關係を有するのは當然であるが、それは單に歴史は繰返すが故に重大なのではない。歴史は其の特殊性に基いて記録されるべく、文化科學はそれ等の個性を基本とする目的論的必然性を明確にすべきものであると考へる。此の意味に於いて歴史研究の重要な意義を認めんとする者である。經濟史の研究に當つても、其の經濟史に記載すべき事項の取捨に際し、其の根柢に一の經濟的價值を前提

としなければならない。それが如何なる内容を有するかは經濟哲學の一つの問題である。

努力に俟つ許りである。

(註一) Mr. John Morley, u. s. [原註]

(註二) Progress and Poverty, Book vii, chap. iv. [原註] 附記。本論文に於いて論すべきことを多く省略してしまつたのは一に未だ十分に考へ盡されなかつたからである。即ち此の一編は一の未定稿である。將來再び同一問題に就いて論ずる機會があると思ふ。未熟の文を公にしたことに就いて深く讀者にお詫びして置く。

社會思想家としての

ウヰリアム・モリス (六六、完)

加田 哲二

一五

用した profit と今日使用する利潤と相等しくないやうに、將來の經濟學に於いて云ふ利潤は恐らく異なるものではないだらうか。斯くの如き學說の變遷を探求するは經濟學史の問題である。經濟史はそれ等の對象として、又は根本として形成さるべき筈のものである。然し經濟史の分野は未だ十分に開拓されてない。唯今後の

社會主義者同盟の目的は、モリスの云つてゐるやうに、革命的國際的社會主義の宣傳にあつた。同盟の設立者はすべての議會主義的改良策

を排してゐたので、彼等は機會主義を斥け、徹底的な革命的社會主義者としての地位を保持したのである。社會主義者同盟の機關誌であるコンモンウキール *The Commonweal. The Official*

争、これ等のことは、民衆の心中に社會主義を宣傳する機會を吾々に與へることを除いては、吾々には關係のないことである」と。かくして宣言書は掲載されてゐる。

Journal of the Socialist League の第一號は一八八五年二月に發刊せられ、その第一號には同盟の大綱を示すべき宣言を掲げてゐる。さうして第一號の卷頭はモリスの陳述を以て始まつてゐる。曰く「富者と貧者、即ち奴隸と奴隸所有者との社會に、すべての文明を終熄せしめる憐れなる制度を假借なく攻撃することは吾々の義務である。」又曰く「吾々は傳統的な商業的特權を持つてゐる人々の政府は、社會のために有用な行動に出づることを得ないのは當然のことであると信ずる。彼等の地位がそれを許さない。労働者からの掠奪物の分配に對する彼等の施設、野蠻民族の掠奪に對する國民的干與のための闘

社會民主主義聯盟から分離した社會主義同盟の宣言書であるから、社會民主主義聯盟に對する立場の表明があると思はれるのが當然である。然るに同盟の宣言書は何等聯盟との交渉について云ふところがない。彼等は直ちに同盟そのものの目的意義を簡明せんとする。同盟の目的は「すべての階級並に國境の撤廢」である。然るに「労働者は社會のすべての富を生産するにも拘らず、其の生産並に分配に對して何等の統制を持つてゐない。」故に同盟はこれらのことを其の根本から改造し、「土地、資本、機械、工場、仕事場、商店、交通機關、鑛山、銀行等すべての富の生産と分配との手段は萬人の共同所有なる

ことを宣言し、共同所有物として取扱ふ。」さうして「單なる政治、專制主義、立憲主義、共和主義は現在の社會制度の下において試練せられ、これらのすべては生活の眞の害惡の矯正に對して失敗してゐる。また不完全な社會改良も問題を解決し得ない。利潤のための競争的協同生産も土地の國有も問題を解決し得ないだらう。：また國家社會主義のそれも、よい解決法ではない。……また單なる行政的變化も、労働者がすべての政權を掌握しない限りは、社會主義へ眞に近づくことは出来ないであらう。」故に社會主義者同盟は完全なる革命的社會主義の實現を目的とする。さうして「は、すべての文明國の労働者の援助なくしては、如何なる所においても、起り得べからざることを知つてゐる。」吾々に對しては、地理的境界も、政治史も、人種も信仰も、敵視、對立の理由とはならない。吾々に對して

は民族の區別はない。たゞ多數の種々な労働者とその味方がある許りである。労働者とその味方の相互の同情は雇主並に掠奪者の階級によつて妨げられる。彼等は諸國の住民の間に敵意と憎惡を挑發することを其の利益としてゐるのである。」大體以上のやうな趣旨の宣言書は千八百八十五年七月五日に開催された社會主義者同盟第一回總會で是認されたのである。(Aymer Vallance, William Morris, His Art, his Writings, and His Public Life. 1st ed. 1897. Cheaper Reprint 1909. pp.331-332)

同盟の會員は極く少數であつた。英蘭並蘇格蘭のすべての支部を通じて、二百を出づること少しであつた。彼等はその月刊機關誌コンモンウキールを發行する外宣傳用小冊子を刊行した。さうしてコンモンウキールを週刊としやうとした。同盟の會計であるモリスは其の費用の

大部分を負担したのであつた。彼は同盟本部のために活動すると共に、ハンマアスミスに同盟支部を建設した。日曜日の夜にはハンマアスミスの家の廣間で、彼と其の僚友とが社會主義の講演を行つた。日曜日の午前と午後には、モリスは倫敦の諸所で宣傳演説をした。彼の講演者としての活動は單にハンマアスミスとロンドンに限られてゐなかつた。彼はオックスフォードに、或はグラスゴウに、チヌスタアフィールドに講演した。彼の講演が其の聴衆に如何なる感動を與へたかを記する餘裕を今は持たない。讀者諸君は私が嘗て本誌において紹介したブルース・グレンシユルの「ウキリアム・モリスと初期の英國社會主義運動」について講演者としてのモリスの風貌の一端を窺ふべきである。

モリスが民衆屋外運動に参加したのも、この同盟時代であつた。千八百八十五年九月ドッド・

ストリートにおける運動はその一つであつた。社會主義者同盟と社會民主主義聯盟並に其の他の團體はドッド・ストリートとバァデッド・ロードで、殊に日曜日に集會を催ふすの常であつた。然るに當時警官と民衆との間に衝突が起つたので、集會が禁止されてゐた。日曜日になると事あれかしの群集がドッド・ストリートに集合して來た。警官は群集を退散させるために骨を折つたが無効であつた。恰度その時一時の鐘が響いて酒場の開場を知らせたので、群集の多くは退散して來た。けれども興奮した警官は死物狂になつて奮闘した。民衆と警官との衝突は起つたのである。モリスその他の社會主義者はその場から檢束された。翌朝彼等はテームス警察署で警官を殴打したと云ふ廉で判事サンダアスの取調を受けた。モリスとサンダアスとの問答は有名のものである。

サンダアス。あなたの職業は？

モリス。私は藝術家で、文學者で歐洲では多少名も知られてゐると思ふ。

サンダアス。私はあなたが警官の命に従はず、彼を殴打したことはないと思ふ。

モリス。私は決して警官を打ちませんでした。

サンダアス。では、あなたを釋放します。

モリス。然し、僕は何にもしないのだ。

サンダアス。では、ここに居なければ居てもよい。

モリス。勿論いたくはない。

この珍妙な問答によつてモリスは釋放せられた。この事件の後社會主義者の運動は急に活氣が出たのである。それは、英國の傳統的精神として言論の自由と云ふことを尊重することがあつたからである。社會主義の善悪は輿論の間ふところではなかつた。たゞ警察権による言論の自由の壓迫と云ふ事實が社會主義側に有利であつた。

當時の社會主義運動は、急進主義者と合同して政治問題について行はれることが多かつた。

然るに商業沈滞の結果、工業の不景氣となり、失業者は日に増し増加して行くのが當時の状態であつた。是等の失業者は千八百八十六年二月八日に倫敦のトラファルガア・スケヤアに集會を開いた。この集會の指導者は主として社會民主主義聯盟の會員であつた。警官は集會が不穩にならうと見るを見て、指導者にハイド・パークに集會を移すやうに要求したので、ジョン・バアンズは其の手に赤旗を持つて、民衆を導いた。民衆は興奮の極、商店の窓硝子を破壊し、大商店を襲ふた。今や全倫敦は混亂の状態に陥ち入り、警官は民衆に突撃した。さうしてこの暴動のためにハインドマン、バアンズ、チャンピオン、ウキリアム等は遂に起訴せられたが、裁判の結果無罪の判決を受けた。

其後失業者の集會は引き續いて開催せられ、社會的動搖は益々顯著となつた。政府當局は高

歴政策に出た。過去三十年間倫敦における各種の宣傳運動の中心であつたトラファルガー・スクェアにおける集會を禁止した。然るにこの禁止を無視して一大示威運動が千八百八十七年十一月十三日の日曜を以て行はれた。「紅血の日曜日」「Bloody Sunday」はこの日であつた。急進主義者と社會主義者とはトラファルガー・スクェアの使用の許可を得るために、社會主義者で蘇格蘭の代議士であるカンニンガム・グラハムを代表者として内務大臣の許に送つた。然るに内務大臣はその使用を許可しないので、彼等は自由行動に出づることとなつた。トラファルガー・スクェアを中心として諸所に警官と民衆との衝突が起つた。さうして若干の犠牲者を出したのであつた。

翌千八百八十八年二月二十八日も同様な示威運動が行はれた。この示威運動にはシンネル

(Simell)と云ふ労働者が警官のために刺殺せられた。さうして運動は鎮壓された。モリスは民衆に代つて犠牲となつたシンネルの死を哀悼した。

“We asked them for a life of toilsome earning,
They bade us bide their leisure for our bread,
We craved to speak to tell our woeful learning,
We came back speechless, bearing back our dead,

Not, one, not one, nor thousands must they slay,

But one and all if they would dusk the day.
“Here lies the sign that we shall break our prison;

Amidst the storm he won a prisoner's rest;
But in the cloudy dawn the sun arisen

Brings us our day of work to win the best.

Not one, not one, nor thousands must they slay,
But one and all if they would dusk the day.

(Morris Chants for Socialist, pp. 75-76)

モリスはシンネルの葬儀の哀悼演説の中で、「斯くの如き事を起さぬ目的で、社會を組織し、この地をして美しく幸福ならしめることが吾々の任務である」と云つた。是等の示威運動は不幸にして官權の壓迫するところとなつて終つた。けれども社會主義運動は是等の事件によつて深く民衆の間に其の勢力を扶植したのであつた。(Mackail, Life, II, 154-156, 159-160, 201-203, Vallance, Morris, pp. 336-341, M. Beer, op. cit. Vol. II, pp. 260-263, Webb, History of

Trade Unionism. 山川、荒畑譯本、四一〇—四一
一頁角田陸雄著新労働組合運動五八—六四頁)
これらの屋外運動は何をモリスに教へたであらうか。モリスは後年「無何有郷たより」「News from No-where, an Epoch of Rest」の中心、トラファルガー・スクェアの事件を回想して、武装のない民衆を大頭棒で武装した悪徒が攻撃して、その後何事も起らず、たゞ無辜の良民の多数が冷たい獄舎に繋がれたのみであると云つてゐるが、當時モリスはどうかこの事件を考へたであらうか。(News from Nowhere, Kerr ed. chap. VII, p. 55) 千八百八十六年の二月八日トラファルガー・スクェアにおける失業者大會が暴動化してしまつたときに、彼は自分の見解をコンモンツキールに書いてゐる。

「自分は社會主義者同盟の政策について、眞面目に同盟の僚友並に維持者に對して數言を費したと思ふ。私は準備の出来てゐないのに、革命的事件に不意に襲はれたと云つ

た。然し、其の事件は實際においては無目的のものであつた。斯様な事柄は始めから吾々の多数が恐れてゐたことである。さうして産業の状態が現在のまゝであるならば、斯様なことは屢々起るであらうと信ずる。もしそのことが起るとすれば、起る毎に悲劇の程度は増大せらるるであらう。故にこれらの出来事の結果に對して用意することは、吾々の第一の任務である。性急な人々によつて誤解される慮れはあるが、私は吾々の任務が益々教育にあると云ひたい。

「不満の副音は、充分に全労働者階級に行き渡つてゐる。その不満を如何にしたならば、新社會の誕生を齎らすやうに利用することが出来るか。この問題を常に吾々が考へなければならぬ問題である。再び事件が起る以前、適當な時に全労働者階級が、社會主義の目的に教育せられるやうな希望の樂觀に過ぎる。乍然、吾々は鞏固な團體が經濟にも、組織にも、行政にも斯様に訓練せらるることを望まなければならぬ。かくの如き人々の團體に被壓迫階級のすべての感激と茫漠たる思想は集中し、徐々として彼等はこれによつて、充分の時間があるならば、教育せらるるであらう。もし然らずとして、彼等が中途半端の教育を受けたにしても、必要なる行動において、彼に従ふことが出来るであらう。

「目的のない叛亂が、預期しないで一時的の成功を収めたそ

のさきの結果を僚友諸君がその胸中に描いて頂きたい。その叛亂は、それと共に政治と行政とに有能練達な少数者を失はせざるに想像することも出来る。然し、それはよい方面を想像してゐるのだ。もし民衆が限定せられてゐるにせよ、ある一定の目的を持つてゐなかつたさきの結果はどうであらう。

「斯くの如く表面に浮動してゐる人々の實力は薄弱であり、さうして立法における彼等の企圖は誤解を受けるであらう。其の結果、失望と新しい不満は更に起り、反革命は直ちに彼等を掃蕩するであらう。然し、それはそれ程の事態にも達しないかも知れない。目的のない叛亂が一時なりとも成功するものでないことは、歴史の數ふところである。従來の失敗したものさへ、(その中のあるものは光榮ある失敗であつた。)例へば不完全とは云へ、其の指導的目的があつた。

「故に教育の課程は、一定の目的に注意を集中せしむるものであつて、吾々の成功には必要なものである。乍然、私は誤解されるのを防がなければならぬ。吾々の爲すところが單に討論會であり、哲學協會であつてはならない。吾々は吾々の見解を正確に、明瞭ならしめたときには、すべての眞の民衆運動に参加しなければならぬ。それは組織上の教育の重要な部分である。

「革命への教育—このことを吾々の政策でなければなら

ないと私は信ずる。必至なるが故に、混亂と苦痛が最も少なく、實現が見らるるやうな新社會の誕生に對する必要がある教育である。(Mackay, Life, II, pp. 161-163.)

斯様な見解を持つてゐたウキリアム・モリスが暴力を是認する無政府主義者と相ひ合はなくなつたのは當然のことと云はなくてはならない。乍然社會主義者同盟中の無政府主義的傾向を有するものとモリスとの意見の公然の衝突は二三年の後において始めて表はれたのである。

一六

以上私はモリスの社會主義運動の方面を記述して來た。其の副産物とも見るべき彼の社會主義的文獻のことについて語らうと思ふ。

先づ詩である。モリスがまた社會民主主義聯盟の一員であつた時分に彼は “Chants for Socialists” を出して始めた。その第一は “The Day is Coming” で、その第二、第三、第四は “The Voice of Toil”, “All for the Cause”, “No

Master” でこれらはすべて「正義」誌上に連載せられ、其の續篇はコンモンウキールに載せられた。このコンセンウキールに載せられた諸々の詩は “Pilgrims of Hope” と云ふ表題の下に集められたのである。

次には散文である。この項目の下には、數冊の小冊子と講演とがある。“The Reward of Labour”, “True and False Society”, “Monopoly; or How Labour is Robbed” 等の小冊子を出してゐる。また千八百八十六年三月八日社會主義者同盟のノルウヰチの支部でした「社會主義」についての講演は “Daylight” に掲載せられ、後小冊子として印刷された。また千八百八十六年の夏には彼は蘇格蘭で “The Labour Question from the Socialist Standpoint” と云ふ演題で講演を行つた。この講演は他のものと共に “The Claims of Labour” と題されて千八百八十六年

エヂンバラにおいて刊行されてゐる。モリスは千八百八十七年十二月五日附の序文をフランク・フェアマンの「社會主義原理解説」(Frank Fairman, The Principles of Socialism made plain) に寄せてゐる。彼はこの序文において著者が採つてゐるバリアメンタリズムに反對して、議會政策を行ふことは勢力の浪費であり、失望の種であることを主張する。モリスは地主と資本家の機關である議會の改善は甚だ困難であることを指摘し、之に代ふるに労働組合の社會主義化こそ有効な方法であるとしてゐる。

モリスは、既に刊行された小冊子二冊とコンモンウキールに寄せた三つの論文とその他の講演二つを寄せて、「Signs of Change」を刊行した。この書の序文は千八百八十八年三月に記されてゐる。同年の四月二日、四日、十日、並に五月六日の日附でモリスはハンマアスミスのケ

ルムスコットの家からコヴェントリーの牧師デュード・ペイントンに宛てて四本の社會主義に關する書翰を發してゐる。後千八百九十四年になつてから、この四つの書翰は三十四部を限つて印刷に附せられた。この書翰の中でモリスは、「各人が各人並に彼の同胞のすべてに對して、倫理的または宗教的意義における責任感」を要求した。また「社會主義の目的は、經濟的目的としては條件の均等を實現し、倫理的規範としては人類愛を實現せんことである」と云つてゐる。

千八百九十一年一月の「The New Review」に彼は「The Socialist Ideal: Art」を寄稿した。次に掲げなければならぬのは、コンモンウキールに寄稿した三篇の歴史物語である。同誌の第三十六號に載せられた「An Old Story Retold」はハンガリーの王マシアス・コルヅィスの物語りであるが、後に「A King's Lesson」

と改題せられて刊行せられた。フロイザート Froissart から材題を取つた長篇の物語は「The Revolt of Ghent」千八百八十八年七月七日の

コンモンウキールから八月十八日の號まで七號に涉つて連載されたが、この物語は遂に再刷せらるゝことがなかつた。歴史物語の中で最も重要なのは「A Dream of John Ball」である。この

物語はコンモンウキールの第四十四號から五十五號まで連載されたもので、千八百八十八年四月、「A King's Lesson」と合冊で別刷されたのである。この書は久しく物語の創作から離れてゐたモリスが物語へ歸つた第一の作で、彼の社會的思想もこの書の中に窺ふことが出来る。ケンウオーシーの批評の言葉を借りれば、この書はモリスの最高の思想と最も意味深い言葉の産物である。ジョン・ボールの説くところは友情である。「友愛は生命であり、友愛の缺乏は死であ

る。この意味深い言葉はモリスの胸底から出た叫びであつた。

ウキリアム・モリスを普通の意味において社會主義的藝術家として最も有名ならしめたのは、其の「無何有郷だより」(News from nowhere, An Epoch of Rest)であらう。このエートピヤを描いた物語は千八百九十年一月十一日のコンモンウキールに始めて掲載されて、十月四日の號に終つてゐる。實に三十九號に涉つて連載された長篇の物語である。其の内容についての記述は他日の機會に譲つて、こゝには、この物語が何故に起草せられ、何を目的としたかを語るに止めやう。千八百八十九年、既に亞米利加合衆國において出版された書籍が、英國の市場に出で、非常の賣行を示した。それはエドワード・ベラミーの「回顧」(Looking Backward)である。この書はライオネル・ジョンソンも云つてゐる。

るやうに將來の完全な社會の光景を吾々に示す目的で著作されたもので、其の中に吾々が見ることが出来るものは、巨大な機械を以て吾々の生活を運用する集中的都市生活であつた。モリスはこのペラミーの書を時代の反影としてその價值を認めた。それは充分な經濟學的知識と興味を以て描かれてゐる。乍然、この窮極の目的とするところは純然たる國家社會主義の社會たるに外ならない。故にトラストの加き資本の集中は國家社會主義への道として歓迎すべきものである。國家社會主義の社會は機械と労働の獎勵を最も必要とする社會である。

モリスはペラミーの回顧に描かれたやうな「物質的の地上の天國」Materialist Earthly Paradise を喜ぶものではない。貧困と富裕と云ふ言葉とその實體がなくなり、其の代りに社會の一般的物質的幸福が置かれる。けれどもそれは

に考案されたものである。さうして藝術は、その言葉の最も廣い、また適當な意味において自由な幸福な人に對する不用な人生の附隨物ではなく、人間幸福の必要な表現であり、缺くべからざる用具である。(Mackail, Life, II, pp. 257-258.)

斯くの如くペラミー氏の「回顧」に對するモリスの批評は、マツケイルも云ふやうにまた彼の根本思想の表現であつた。モリスは「回顧」に對する原理的批評のみでは満足しなかつた。彼はその原理を體現した新社會の状態を其の藝術的筆致によつて描くことを欲した。その結果創作せられたのが、「無何有郷だより」の一篇である。故に「無何有郷だより」一篇の思想はヴェランズの指摘してゐる通り二つに要約することが出来る。即ち労働における快樂は藝術と満足との眞隨であること並にこの地上における肉體上の喜びは、人間の自然的状態であることである。

この二つの目的を讀者の腦中に印象せしむるた

形態であつて精神ではない。快樂の最高の源泉たる藝術こそ社會生活の指導的原理に外ならない。彼はこの「回顧」を千八百八十九年六月のコンモンウキールに掲げた一文で批評してゐる。

「ペラミー氏は現在において唯一の労働の刺激である飢饉の恐怖に代るべき誘因を求めぬのに不必要に苦心をしてゐる。それでゐてそれは明かに失敗である。有用な、さうして幸福な労働に對する眞の誘因が労働の快樂であり、またあらねばならぬことは屢々繰り返して云ふ必要はない。」
「生活に必要な労働の組織の問題が、誰れも責任を燃じない一種の寛術のやうな作用で巨大な國民的中央集權によつて行ふことが出来るさ考へてゐる社會主義者のあることを指摘して置く必要がある。然るに行政の單位は其の鎖細なことに各人が責任を感じ、この事に興味を持つる位小さなことが必要である。各個人は國家と云ふやうな抽象的のものに其の人生の行事を任かすことは出来ない。彼等は各々其のこゝとを取扱はなければならぬ。生活の多様と云ふことは、條件の均等と云ふことと共に眞の共產主義の目的である。さうして、この二つのことの結合のみが眞の自由を持ち來すことが出来る。現代の民族國家は私達が終世せしめやうとし、その終滅と共に亡ぶる商業戰のために人工的

めに描かれたのが「無何有郷だより」である。この點において私はモリスが他の社會主義者殊にフェビアン協會の人々や社會民主主義者が社會改造において忘れ勝ちであつた一面を見、さうしてこれを高調したものであることをタウンシェンド夫人と共に認めない譯には行かない。(Vallance, Wm Morris, pp. 342-348, Mackail, Life, II, pp. 256-258. Townshend, Wm Morris, 加田哲二譯 モリス評傳五八一六六頁)

一七

モリスの書齋での仕事を一瞥した吾々はまたその實際運動へ歸らねばならない。社會主義者同盟はドッド・ストリートの言論の自由のための示威運動後少しく其の會員の増加し來たし、一般に認められて來ことは前段既に少く語るところがあつた。然るに間もなく同盟内部において内訌の存すること、並にその紛争の結果モリス

一派が同盟から去るやうなことがあらうと云ふことは、千八百八十五年十月三十一日附のバアンジョン夫人宛のモリスの書翰によつて明かであつた。(Mackail, Life, II. Pp. 157-158)この内部的紛争と云ふのは、無政府主義者の擡頭であつた。けれども内訌が表面に表はれて、遂にモリス一派が同盟を脱退して別に社會主義團體を建設するまでには三四年の星霜を經過した。この三四年の内にモリスの注意は純粹の社會主義運動から、工藝と藝術とを打つて一丸とし、モリス平常の理想を實現すべく實際的の事業に従事した。彼は、藝術と工藝の一致のために、時期を定めて、藝術的工藝家の作品を展覽して世間の注意を促さうと努力した。この目的のために彼は「藝術並に工藝協會」(Arts and Crafts Association 始めは Association of the Combined Arts)と呼ばれてゐた。)を設立した。また彼は

千八百八十六年の二月からホームアのオデッセイの興味ある翻譯に従事した。これが彼が文學への復歸の第一着手であり、社會主義への態度の變改の原因でもあつた。さうして二年後には A Tale of the House of the Wolfings の出版となつた。(Mackail, II, pp. 206 seq. p. 174)この藝術的創作への復歸の間に社會主義者同盟の形勢は益々險惡に陥つたのである。其の直接の原因となつたものは、ジェームス・ブラックウェルが千八百八十九年四月十三日にコンモンウキールの中に自由論壇を設けて、社會主義殊に近時の社會主義者同盟における顯著な無政府主義主義への傾向、並にヴァレンチアの無政府主義者會議で可決されたある項目についての自由なる論議を行ふことを提議したことに始まつてゐる。モリスはこの提議のあつた後、その夏に巴里で開催された社會主義者會議に、社會主義同

盟の代議員として出席し、演説をして、同會議に異彩を放つたのであつた。彼は歸英すると共に、自己の立場を明かし、無政府主義に對する觀察を明確にした。その一文は千八百八十九年八月十七日のコンモンウキールに掲載されたものである。その内容は次の如きものである。

「私は自分を共產主義者と呼ぶことによつて、この一文を始めやう。」モリスはかう書き始めてゐる。「私はこの共產主義なる語に他の言葉を加へて、之を變改しやうとは欲しない。共產主義の目的は、すべての人々に對する完全なる條件の均等であると私は信ずる。この點に違つてゐないあらゆる社會主義的傾向は、單に現在の社會との妥協に過ぎない。それは單に目的地への道中の一點に過ぎない。……條件の均等と物質的自然の原因結果を承認するこの二つのことから、すべての共產主義的生活は始まるのである。……すべての純正なる社會主義者は共產主義が社會主義の必然的發展であることを認める。けれども吾々もつと考へなければならぬ。……權威は必要である。各人が自然的に承認した結合の意識と云ふ形態において權威を認める。けれども之を認めることはその亂用を許すことではない。權威の使用は最小限度に限られなくてはならぬ。」

けれどもこの最小限度についての「社會的また公共的意識が行動の規範として」必要である。……「社會的意識と云ふのは、各人に共通であればこそ、社會的と云ふので、この意識が個人の自由への個人的干渉を禁ずる、さうしても他の方法でこの干渉を排すことが出来ない場合には權力を用ゆるのである。この意識なくして社會はないと信ずる。更らに社會なくして人間はその生活が不可能のみならず、斯くの如き状態は考へ能はざるところである。」更らにモリスは共產主義なる用語についての誤解を解いてゐる。共產主義なる語は、資本主義的社會その他の中に散在してゐる孤立的社會生活であると云ふやうに解せられた。その解釋は全然誤つてゐる。「私は條件の均等従つて私有財産の廢止と云ふ意味で社會主義よりは、より正確な意味に用ゐるのである。この意味において諸君は資本主義または契約の自由の現在の社會が終熄しない間は、共產主義的に生活し得ないのである。……多數決に關してもう一度考察して見よう。すべての支配は多數の支配、即ち有功な多數の支配である。もしある場合に少數が支配するものとすれば、彼等は單なる數量の多數よりも、よく組織せられ、武裝せられ敏活にして、精神的であるからである。故にこの有効なる多數が少數を支配する。それは出來得る限りは強制し得るし、またするだらう。社會的意識が充分に發達して、社會の側においても強制が不可能な時代が來るであら

う。私はこのときの来るのを望む。けれども、この時代に至るに社会は徹底的に共産主義を實現してゐる人々から成つてゐるので、社会各員がその隣人を攻撃するやうなことはないであらう。私はこのやうな状態が遠い將來のことである云ふことを承認したからと云つて、悲觀論者であるとは考へない。然らば現在はどうすればよいのか。私は個人が反社会的に行動する以上、この場合彼は社会に對して權利を持つてゐないと思ふ。……さうしてすべての人々が均等である社会においては、互譲が各人の心中に、強制的代表制度の權威または之に代るべきものが、社会的意識と全然一致すると云ふ印象を興へると信するので、その原理に關する争論はないと思ふ。」かくてモリスは其の結論において述べてゐる。「吾々に平等を興へる何物でも、それが例へば不利益を伴ふにせよ、自分に満足な興へる。さうして私はずべての社会主義者の根本思想はこれであることを見た。私は少數の黨派を區別があつてもいいと思ふ。さうして氣質の違ふ人々の間の必然的差異はそのまゝにして置いていいと思ふ。故に私は信する。多くの意見があるから云つてそれは重大な對人の素を作るものではない。」

(Vallance, Wm. Morris, pp. 349-352)

この書翰をコンモンウキールに寄せてたモリスは彼とその僚友との差異は、原理に對する根

本的の差異と云ふよりは寧ろ文字の末に拘泥した感情論であることを主張して共に和解して、社会一般の幸福のために努力せんことを提議した。乍然モリスと無政府主義者との間に掘られたあつた溝梁は本質的に深いものであつた。千八百九十年の始めにおいて社会主義者同盟の實行委員會は無政府主義者と名乗る一團の人々によつて占領された。彼等の第一になしたことはモリスをしてコンモンウキールの編輯から退かしめ、フランク・キッツと稱する極左黨の人をして之に代らしめたことである。けれどもモリスは忍耐を以て、コンモンウキールのために必要な經費を支出し續けてゐた。彼が同誌に「無何有郷だより」を寄稿したのは、その編輯退任の後のことであつた。彼は幾度か同盟内の無政府主義者と和解しやうと努力したかはここに記するを要しない。けれども大勢は如何ともする

ことが出来なくなつて來た。コンモンウキールの誌上には無遠慮な無政府主義論や之を實現する方法としての暴行論が掲載され始めると同時に、同盟内の會合の場合においても議長を排斥したり、權威を認めないと云ふやうな傾向が顯著になつて來た。モリスは同盟との絶縁を止むを得ないものと考へて、乍然彼は千八百九十年十一月十五日のコンモンウキールに一文を投じて、彼の態度についての最後の陳述をなし、彼の僚友に訴へるところがあつた。彼は「吾等は何處にありや」と云ふ表題の下に書いてゐる。

「この國に社会主義が復活してから最早七年になる。多くの希望や失望がその間にはあるので、ある人々にとつては、その時期は永いものであらう。一の重要な運動の歴史において七年の歲月は短いものである。けれども、斯くの如き短少な時期において社会主義がなした程の進歩を齎した運動は少數であらう。」

「吾々が成し遂げやうとしたことは何であつたらうか。巨大なる文明の組織がその上に建設せられてゐる社会組織、舊

時の死滅せんとしてゐる諸制度と數世紀の間關つて建設された社会制度、人間の物質的環境に對する現代文明の勝利に充ちてゐる社会制度、この社会制度を變革することである。七年の間に斯くの如き大事業の明白なる印象を興へることが出来たであらうか。

「また現在の社会の基礎を轉覆する事業を開始し、之を行ひつゝ、ある人々の性質を考へ見よ。その不幸なる労働の生涯において、その僚友よりも、より不成功な少數の労働者並に有識無産階級の少數である。さうして有識的無産者の熱心な社会主義の追求は、確かに、其の隆盛に赴くべき少數の機會を失ふことになつたであらう。彼等の一、二は政治的闘争のことを考へた。外國政府の官僚的専制から逃れて來た少數の外國亡命客もゐた。さうして其處此處には非實際的の半ば狂暴な藝術家や著述家がゐた。」

「運動者は斯様の状態であつた。けれども彼等雖も何事かをなすには充分であつた。彼等によつてではないが、彼等を通じての七年間に自由への新運動は、すべての豫期に反して、社会主義の思想をその時代に印したのであつた。」

「行政や事務に關する豫期してゐなかつた大才能が吾々の中に發見せられたとは云ひ難い。また博大なる思想があつたとは云ひ得ない。吾々は吾々が考へたやうになつた。けれどもこれは偉大なことではない。吾々は外の黨派と同じやうに、また時期を同じくして、多くの誤りを侵してゐる。」

吾々の間には絶えず争があつた。またあるときは争になるのを恐れたので、眞に賛同してゐないことにまで、不本意ながら賛同したこともあつた。吾々の間には勇氣も献身もあつたけれども、また利己、自惚、無精、輕卒もあつた。

私が始めて社會主義運動に参加したときには、私は數人の労働者出の指導者が、すべての中産階級の援助を退けて、歴史上の大人物たることを望んだ。私は出来ることならば今でもそれを望むのである。私は非常にそのことを望むけれども虚心にして言へば、現在のところではそれは駄目らしい。乍然、さう云ふ障礙があるにも拘らず、私はその印象を受けてゐることは繰り返したい。それは何故か。その理由は既に言つてゐる。けれどもそれを、再び云ふ必要があるだらう。それは次のやうなことである。一見堅固の、やうな現在の社會の基礎がその崩壞に近づいてゐる。それはその仕事を成し遂げた。さうしてそれは今あるものに變化されんとしつゝある。

「この點まで、吾々は吾々を勇氣づけるものを持つてゐる。けれども吾々の或る者は社會主義が觀察せらるる方法が變つて来たにも拘らず、失望したではないか。吾々が失望するのは極めて自然である。吾々が共に初めて仕事を始めたときは、論ぜられることは社會主義の大理想のみであつた。さうして其の實現の如き遠い將來のこととしてゐたので、吾々は何等その實現の方法について考へることがなかつた。

とは例へずすべての豫想に反して成功するやうなことがあつたにしても、彼等は次の手段についての考へがないので非難さるべきだからである。故に、よく行つたところで吾々の支配者は、依然として吾々の支配者である。何となれば、彼等に代はるべき何ものも外にないからである。吾々は斯の如き變化に對して未だ準備がない。(圈點は原文のイタリック。以下準之。)

「私は、私が忍耐の足りない方法と名づけるもの作用するべき二方向を掲げた。私は吾々のある者が活動し得る方法の唯一の方向について數言を費す前に私は出来るだけ簡単に社會主義運動の現状についての私の見解を述べたいと欲する。

「多少社會主義に觸れた人々で、明白な社會主義者でない人々の意見は新組合主義と姑息策とに向つてゐる。彼等は資本家からその特權的利潤の一部を奪取し得ると信じ、雇主もまた、労働者側の團體的脅迫によつて判斷して、このことがなし得るのを信じた。吾々社會主義者は、そのことがなし得ないのを信じた。吾々社會主義者は、そのことがたと部分的にしかなされぬこと並に、もしそれがなされれば、人々はそこに安じてゐることが出来ないことをよく知つてゐる。乍然、彼等はそれを知らないのだ。

「私は國家社會主義そのものも信じなければ、またそれが完全な計畫であるとも思はない。乍然、國家社會主義に對す

つたのである。たゞ吾々は吾々の生活を悲劇化するが、所謂下劣なる文明の平和から吾々を救ふところの大劇的事件のみを考へたばかりであつた。社會主義が普及されて來ると共に、この事態は變化した。吾々の成功は、最初吾々を導いた大理想を模糊たらしめたのである。部分的な、さうして野卑なる社會主義の實現が吾々に迫つてゐる。私は吾々が社會主義が實現せらるるだらうと信頼してゐることを信じてゐる。吾々が自分達の生活の中に、社會主義が實現せらるるを見——感じ——ても不思議はない。故に實現の方法が理想よりも吾々の眼前のことである。乍然、少くとも部分的には直ちに實現し得ない方法のことについて論議するの必要はない。さうして斯の如き部分的方法の性質として、例へそれが必要であるにしても、それは不純のものであり、失望さすものである。

「この方法の問題については二つの傾向がある。その第一は吾々が古くから知つてゐる姑息手段である。それは一般の不満が濃厚になり、社會主義の發達が明かになるにつれて從來よりは非常に重大になつた。その第二は、吾々の絶對的支配者であり、それを亡ぼすは極めて容易である權威に對する部分的な必然的に無用で、無價値の叛亂である。

「私は是等の兩方法に對して賛同しない。何となれば、社會主義の何ものたるかを解さない人々の行ふ姑息手段と叛亂

る叛亂は、固かに試つた、わづら、さし、コン、新秩序の完全なる開發に先立つものと考へられる。甚だしい單調のメラーミー氏の理想郷に關する著作が成功してゐると云ふことは、近時の傾向を示すべきの徴候である。フェヒマン協會の講演者や小冊子記者である賢明な吾々の僚友に對して一般が注意を拂つてゐるのは、彼等の文學的才能によるのでは勿論ない、民衆が多少共彼等の方向の頭を向け

て來たのである。

「私は次のやうに思ふ。民衆が唯に不満である許りでなく眞に労働の状態の改善を希望すると共に、其の目的に對する手段に疑問のある場合、云ひ換へれば最初の手段を目的と見るが如き場合、即ち民衆が社會主義について興奮し、社會主義について何ものをも知らない多くの人々が社會主義者だと思つてゐるやうな場合においては、過渡期の政策を考慮することなく社會主義の簡單な諸原理を他に示すべきである。

「斯く云ふのは、私が完全な社會主義者——または共產主義者と呼ぶ——である人々に對して話しかけるのだとは讀者にお判りのことと思ふ。

いことである。彼等のなすところには、あるよいものがあるかも知れない。乍然、吾々は、彼等の方法が正道以外にあると知つたときに、彼等と心から協働することも出来ないし、またその必要もない。

「私は繰り返す。吾々の任務は社會主義者を作ることである。即ち民衆に對して社會主義はよきことであり、可能であることを知らせるにある。さうして吾々が、そんな風に考へることの出来る多くの人々を得たならば、彼等は、その原理を實行するに必要な行動を發見するであらう。故に私は云ふ。社會主義者を作れと。吾々社會主義者はこれよりも有用なことをなすことは出来ない。」(Mackail, Life, II, pp. 244-249)

この條理の立つた一文をコンモンウキールに投じたモリスは社會主義者同盟中の無政府主義者の一團から、その次號において一齊の攻撃を受けた。或る者は「吾々の僚友が吾々に講釋をする」と云つて怒つた。またある者はダイナマイトで公然と社會に對して挑戦すべしと論駁した。けれども既にモリスは十一月二十一日に社會主義者同盟を去つてゐた。モリスの去つた社

は、その當初社會民主主義同盟に加入して活動した時のやうな戰闘的の社會主義者ではなかつた。彼の態度は寧ろマッケイルも云つてゐるやうに「受動的社會主義」Passive Socialismであつた。(Life, II, p. 242) 即ち社會主義者を作るこ

とが彼の主なる願ひであつた。時機が進んで、思想が一般に普及するまで、隱忍自重するのをその義務であると考へたのである。モリスの周圍にあつた友人等は、ハンマアミスで社會主義者同盟の支部を組織してゐた。この同盟支部はモリスの同盟脱退と共に同盟から分離して、モリスの傘下にハンマアミス社會主義者協會 The Hammersmith Socialist Society を形成した。モリスが社會主義者同盟脱退後二日目のことであつた。彼等はモリスによつて執筆された回狀を英蘭並蘇格蘭の社會主義者同盟の支部に送つて、彼等の態度を明かにし

た。回狀には次の如く書かれてある。「社會主義者同盟のハンマアミス支部が同盟から分離するに當つて採つた必要なる行動についての説明を諸君に知らせることは適宜のことと信ずる。「社會主義者同盟の中に二つの流派即ち其の一は益々無政府主義に傾く一派で、其二はこの傾向に反對する一派があると云ふ事實に盲目たることは吾々に對して不可能のことであつた。同盟の機關誌コンモンウキールは、先の會議の投票によつて、無政府主義的意見を代表する人々の手に移つた。さうして委員會の多數も、無政府主義である。吾々が吾々の意見を代表してゐるものと考へてゐない諸論が、委員會の多數に承認を経て、コンモンウキールに現はれた。斯くの如き事情の下において吾々の取るべき道は二つあつた。其の一は同盟内にあつて、吾々の意見に反對するものに熱心に反對することである。その二は同盟を脱退して、獨立に吾々の宣傳を行ふことである。吾々は第二の方法を取つた。何となれば、吾々は吾々と相合はない僚友の誠意を信じたからである。さうして如何に彼等が吾々に譲り、コンモンウキールから吾々の承認しない言論を取り除くにしても、彼等は、吾々を言論並に行動の自由を沮害するものとして見ることをなしに、そのことをなし得ないからである。更らに資本主義に攻撃すべき時間の大部分が、吾々の

會主義者同盟が無政府主義者の横行濶歩に任されたのは自然の勢であつた。コンモンウキールの論壇は益々狂暴なる暴力論を以て填められて來た。さうして千八百九十二年四月には爆彈製造の廉を以て、無政府主義者が拘引處罰せられた。けれども同志における狂暴な暴力論は底止することがなく、爆彈事件の取調、裁判、處罰にあつた内務省官吏、裁判官、警察官の暗殺を誘導するやうな文章が掲げられた。そこで當局は、コンモンウキールの持主で、其の記事に關係のあるニコル(D. J. Nicol)を告發し、十八ヶ月の禁錮に處したのである。コンモンウキールの最後は斯くの如くであつた。さうしてこれと共に社會主義者同盟の殘黨も消え失せたのであつた。(Mackail, Life, II, pp. 249-251)

一八

社會主義者同盟から脱退した當時のモリス

た。回狀には次の如く書かれてある。

「社會主義者同盟のハンマアミス支部が同盟から分離するに當つて採つた必要なる行動についての説明を諸君に知らせることは適宜のことと信ずる。「社會主義者同盟の中に二つの流派即ち其の一は益々無政府主義に傾く一派で、其二はこの傾向に反對する一派があると云ふ事實に盲目たることは吾々に對して不可能のことであつた。同盟の機關誌コンモンウキールは、先の會議の投票によつて、無政府主義的意見を代表する人々の手に移つた。さうして委員會の多數も、無政府主義である。吾々が吾々の意見を代表してゐるものと考へてゐない諸論が、委員會の多數に承認を経て、コンモンウキールに現はれた。斯くの如き事情の下において吾々の取るべき道は二つあつた。其の一は同盟内にあつて、吾々の意見に反對するものに熱心に反對することである。その二は同盟を脱退して、獨立に吾々の宣傳を行ふことである。吾々は第二の方法を取つた。何となれば、吾々は吾々と相合はない僚友の誠意を信じたからである。さうして如何に彼等が吾々に譲り、コンモンウキールから吾々の承認しない言論を取り除くにしても、彼等は、吾々を言論並に行動の自由を沮害するものとして見ることをなしに、そのことをなし得ないからである。更らに資本主義に攻撃すべき時間の大部分が、吾々の

僚友との論争に費さるるを考へたからである。故に吾々は吾々の自由を保持し、他人の自由に干渉することなく、同盟から平和的に脱退することが良方法と考へたからである。

「吾々はハンマースミス社會主義者協會の會名の下に再び團結した。さうして、吾々の社會主義促進の努力が、吾々の新地位によつて、沮害されぬのみでなく、反つて刺激せられ、且つあらゆる機會において、吾々が可能と信ずるときは、社會主義者同盟中または同盟外の社會主義のすべての團體と協同行動を採ることを希望する。」(Mackail, Life, II, pp. 251-252.)

ハンマースミス社會主義者協會の會員たるには、同協會の宣言書に表現せられた社會主義の諸原理に賛同し、會費年一志を納付することが必要であつた。協會の目的はたゞ漠然と社會主義の諸原理の普及とされてゐた。會合の場所はモリスのケルムスコットの家であつた。エメリー・ウォルカアがその秘書で、モリスが會計であつた。モリスは十二月九日に協會の宣言書を書いた。この宣言書は彼の社會主義に對して何

であつたが、時の経過するに従つて彼は社會主義の實際運動から遠ざからしめたのである。さうしてまた當時における英國社會主義運動も急激な社會革命の決して一朝に成らざることを悟つて、社會主義思想を以て、輿論への浸潤を行ふ政策を取つて來た。着實穩健なフェビアン協會一派の社會主義者は其の最たるものであつた。革命を沮害するものとして社會政策を斥けるのは最早極少數の極左派に限られてゐる有様であつた。乍然、斯くの如き大勢にも拘らず社會主義の運動に携はつてゐる人々の間には幾多の黨派があつた。然るに今やこの大勢に促されて、各黨派の合同を企てやうとする試みが千八百九十三年に起つたのである。モリスもまた極めて熱心にこの運動に参加した。さうしてこの事業が歴史の教訓に基いた共同の理想によつてなされるべきであると考へたのである。そこで彼

ものをも附加するものでなかつた。それは資本主義的社會組織に對する批判の後に、國家社會主義を窮極の理想として斥け、無政府主義的教義に對して可成の熱烈を以て、これを排斥した。

「吾々の努力するのは社會の解體ではなくして、その再完成である。現代の社會を攻撃してゐるある人々の抱懷してゐる各個人の完全な獨立、即ち社會なき自由の思想は單にその實現が不可能な許りでなく、深く研究するときは考へ得ざる所である。」故に將來の社會にあつても何等かの組織がなくてはならない。勞働者の一般的團結は、自發的に其の不適當な地位を避け、特權を持たずして、責任を獲得するまで、徐々に資本家を其の地位から驅逐し、その團體を以て社會を組織するであらう。(Mackail, Life, II, pp. 253-254.)

社會主義に對する彼の信仰は元のやうに強烈

は千八百八十六年から八十八年の間にコンモンウキールに寄稿した諸論文を採り、イー・ペルフォート・バックスと共同して、「社會主義論」Socialism, its Growth and Outcome. を上梓した。この書がエメア・ヴァランスの云ふやうに「モリスの最後の、最も圓熟した多分社會主義に關する最も重要な著書」(p. 350)であるか否かの價值判断は別として、この書が最も組織的のものなることは之を云ひ得るであらう。かくて勞働者階級の國際的祝日たる五月一日に、モリスはハインドマン、並にバアナアド・ショウと共に英國における最も著明な社會主義者團體の代表者として、「英國社會主義者宣言」を起草し、社會民主主義聯盟、フェビアン協會、ハンマースミス社會主義者協會から選出せられた十五名の合同委員會の人々によつて署名せられ、是等三團體の承認を経て、之を發表したのであ

る。この宣言書はモリスの思想によつて影響されたと云ふよりも、バアナアド・ショウやシドニー・ウェッブ流の色彩の濃厚のもので、穏和な集産主義の主張であつた。モリスが初めて民主主義聯盟の一員となつたときの綱領は斯くの如きものであつた。モリスは幾年かの社會運動の實際生活から、この温健着實な思想に同意した。

(Mackail, Life, II. pp. 303-306, 拙譯モリス評傳七九頁以下) 乍然モリスは社會主義團體の形式的合併は重要なものとは信じてゐなかつたのである。千八百九十四年の十月二十五日の書翰で、クラリオン新聞でこのことを論じてゐるロバート・ブランチフォードに宛て、現在の團體を解散して合併するの必要なく、現存の團體を基礎とし、之に生産手段の國有なる共通點を得れば足りるのだと云つてゐる。(Mackail, II. p. 307) さうしてモリスの社會主義に對する根本思想

にも何等の變改がなかつた。モリスは其の社會主義に變改したところがあるかと云ふ米國新聞の通信員の間に對して、千八百九十六年一月九日に答へてゐる。

「私は社會主義に關する私の精神を變更しはしない。藝術と社會主義との關係についての私の見解は次の通りである。所謂現今の社會は全然特權階級の利益のために組織されてゐる。勞働階級はたゞその制度における機械としてのみ考へらるるに過ぎない。このことは永久的な、然も莫大な浪費である。さうして眞の效用物の生産に對する組織は單に第二次的のみ考察せらるるに過ぎない。この浪費が全文明世界をして、人工的貧困たらしめるのである。この結果すべての階級の人々は其の合理的諸欲望の充足を妨げられる。富者は凡俗主義に隸屬し、貧者は貧窮の奴隷である。吾々は非常な犠牲を拂はずして、自分達の欲するものを得ることが出来ない。それをなし得るところもまた極めて部分的であるし、ましたなし得る人も少ない。故に吾々が藝術を欲する以前に、この人工的貧窮から脱れなければならぬ。私の考へるところを以てすれば、かくの如く貧窮から解放されたときには、美その他の事象に對する人間の自然的本能は、正當の地位を得る。そのときに至つて吾々は

藝術を欲する。何さなれば吾々は眞に富んであり、吾々の欲するものを獲得し得るからである。](Mackail, II. pp. 307-308)

斯くの如く終始一貫した社會主義の立場にあつたモリスがその晩年において受動的の態度を採つたのは、より多く藝術的創作に興味を感じたからであつた。彼は中世紀に行はれた珍奇な藝術的の書物を愛し、其の蒐集に務め、さうして、滅亡した印刷術の復興に努力し、自らケルムスコット・プレスとして五十餘冊の書籍を刊行、雕刻し、(Vallance, op. cit. pp. 453-4) 其の他數種の美しいロマンスを書いたのであつた。かくて其の晩年は静穩な幸福な勞作に費されたのであつた。乍然、彼はこの平和な生活においても、民衆の幸福を強調する社會主義の主張を忘れたのではない。彼はその最後に至るまで時々社會主義の講演に出掛けた。彼の死する一年前に、彼はオックスフォード社會主義者同盟のた

めに一場の講演をした。更らに半ヶ月の後には社會民主主義聯盟の新年會へ出席して、一場の演説をなした。さうしてその二日後彼はケルムスコットの家で其の最後の日曜講演を行つた。

(拙譯 モリス評傳八一―八二頁)

最後の一年間に彼の健康は益々衰退して行つた。彼は絶えず咳に悩まされた。さうして不眠症に陥つた。けれども Earthly Paradise の一卷を以て、かのスキンプアンをしてチャウサー以來の物語作家と稱せられた、このケルムスコットのチャウサーは、其の最後の作、The Sundering Wood の執筆を續けた。彼の健康は益々衰へるばかりなので、六月の大部分は醫師の勸告によつて、フォルクストンに轉地療養を試みたが無効であつた。更らにノルウエーへの航海が彼の健康に良い結果を齎らすであらうと云ふので、七月二十二日發の瀛船でこのことが企てられた。

けれどもこの試みも、衰退し行くモリスの身體を如何ともすることが出来なかつた。彼は故國に歸る止むなきに至つた。八月十八日の未明ケルプリーに着いて、直ちにケルムスコットの家に行く希望ではあつたが、彼の容態は之を許さなかつた。さうしてハンマアスミスの家にと落ちついた。九月八日には、最後の大作たる「The Sundering Flood」の最後の文章を口述し終つた。モリスの容態は悲觀しなければならぬものであつた。彼がノルウェーから歸つた當時から左肺の充血は繼續し、身體の衰弱は甚だしいものであつた。彼は死を覺悟した。死に近づくと共に自己統制の力を失つて、さうして屢々感情の激動を感じたのであつた。けれども彼は其の最後まで藝術的であつた。彼の友のアーノルド・ドルメッシ (Arnold Dolmetsch) は彼のために十六世紀の小琴を彼の請のまゝに彈い

た。さうして彼は喜んだのである。けれども死は遂に來た。十月三日の土曜日の午前十一時から十二時の間に「詩人で藝術家で、工藝家で社會主義者」であつたモリスはその多端な六十二年の生涯を終つた。さうして三日の後彼の死體は色々な草花で飾られた車に乗せられ、土地の人々に引かれて、ケルムスコットの小寺院に葬られた。彼の主治醫はモリスの死の原因について云ふ。「彼は社會主義の原理を宣傳する熱心のために犠牲になつたのだと私は斷言する」と。他の醫師はまた云ふ。「彼の病はウヰリアム・モリスだからなのだ。彼は普通の人の十人前も働いたからだ」と。私はこの犠牲の、然も自己に忠實な一生涯を甚だ尊いものと思ふ。(Mackail, II, pp. 343-367)

以上を以て、ウヰリアム・モリスの生涯と其の事業並に思想の一端を傳へ得たことと思ふ。筆者は他日の機會におい

て、モリスの著述によつて、以上數回に渉りて、傳記的に紹介したモリスの思想を系統的、組織的に論述し、他の同時代の社會思想との交渉に及びたいと考へてゐる。社會思想家としてのモリスはこの部分を附加することによつて完成する筈である。今六回に渉る長篇を欄筆するに當り、貴重な紙面を割くことを許されたる本誌編輯者と長く愛讀下さつた讀者諸君に感謝の意を表する。(一九二二・一一・一五)

伊太利に於ける社會

主義學說の發達 (下)

金原賢之助

五

社會革命家の學說の方に向つて行つた唯一の社會主義者は、國民的勇士 Giuseppe Garibaldi 其人であつた。Garibaldi は 1870 年に明かに International に左祖し、而して其れが爲に熱心

に盡力した。乍併、社會主義に對する彼の純粹なる慈善家的解釋(其解釋には經濟と政治との關係に對する一層深き理解が缺けてゐた)と、労働問題を大ざつぱりに解決することに依つて漸く基礎を置いたが尙統一の纖弱なる祖國を再び問題にし様とする彼の策戦上の配慮との此二つの事が、彼をして、假令心の定らぬ臆病ものではなかつたけれども、取りとめのない且時々は皺だらけの人の様に思はせた。彼は、Mazzini の小ブルジョア的な、國內に限られた社會主義には反對なる旨を述べた、而して International を「將來の太陽」(Sonne der Zukunft) として指示した。けれども彼は、社會主義は何人か何物かを略取せんと欲するものであると云ふ解釋には劇しく反對した。従つて富者を貧窮ならしむることよりは寧ろ貧者を富裕ならしむることに關係してゐるのであつた。彼は同時に私有財産の維